

宗教改革期の占星術

―一五二四年の大会合へ向けて―

I

活版印刷術なくして、宗教改革なし」と謳われるように、一六世紀に改革を推進したマルティン・ルターやウルリヒ・ツヴィングリらの者は、グーテンベルク印刷術を駆使して、改革理念を伝播させるに成功した。それには書籍印刷のかたちだけではなく、パンフレットとも大いに利用された。その際、理解を助けるために木版画がパンツットの表紙や挿絵として多用された。まだ識字率の低かったこの時代は、視覚に訴える手段は有効であった。特に木版画を主体としたビアンコで、運搬も容易であり、理念の伝達手段として有効に機能した。絵画の内容も聖書物語、日常生活の場面、戯画の利用など情報の受け側の民衆にもきわめて理解しやすいモチーフが使用されていた¹⁾。活版印刷術は改革理念の伝達だけではなく、宗教改革時代の人々の意

だった。中山茂によれば²⁾、占星術には「天変占星術（政治占星術）」と「宿命占星術（ホロスコープ占星術）」に大別できるといふ。前者は、天上の異変が地上の政治的問題に直接影響を与えるので、天変によって地上の現象を占えるとするものであり、後者は、個人の誕生時における惑星の位置からその人の運勢が占えるとするものである。「天変占星術」の系として、地上の気象などが天体の動きによって支配されるという「自然占星術」がある。この「自然占星術」は長期の気象予報に利用され、占星気象学といえるものが生まれた。

この占星気象学にあたる預言が宗教改革期に盛り上がりを見せていた。ツヴィングリは晩年の著作『摂理論』（一五三〇年）において次のように述べている³⁾。

占星術師は彼らの天文暦書のなかで、一五二四年に大洪水が起き、すべてのものが滅亡すると脅迫していた。それに加えて、幾人かの説教師たちも世界の終わりがくるかのように警鐘を鳴らしていた。占星術師はこのことを天体の衝や合から推し量り、知る

森田 安一

が、説教師は信仰の確信から、背信と渾神、すべての実直さと良俗の荒廃から知る。…この年は、水のために地上に住むべき場所がなくなることもなく、過ぎ去った。いくつかの場所で洪水があつたが、スイスの河川は例年より水位は低かった。

一五二四年には太陽・月・五惑星の大会合が起こることは一五世紀の末から預言されていたが、スイスでも大きな話題になっていたことがツヴィングリの著作からも窺える。一四九九年にテュービンゲン大学の天文学者ヨハネス・シュテューフラがヤーコプ・プフラウムとともに『天体暦』をラテン語で出版し、一五三一年までの天体の動きを示し、一五二四年について次のように書いていた。⁽⁴⁾

この年には日食も月食も見られない。しかし、この年にはもつとも驚嘆に値する諸惑星の配置が起きる。二月に大小さまざまな二〇の合が起きる。その内の一六の合は水に関連するサインをもっている。そのことは地球上のあらゆることにとって、気候、王国、地域、諸身分、高位聖職者、動物、海の獣、そして地上に住めるものすべてにとって、明らかな変動、変化、交替を意味する。それは数世紀のあいだ歴史家や長老からもほとんど聞いたことがないほどのことである。それゆえ、あなたがたすべてのキリスト者よ、頭を上げなさい。

シュテューフラは一五二四年に大洪水が起きるとは明確に述べてはいないが、特にイタリアでは一五二二年までに七版を数えるほど売れ、話題の本になった。そのイタリアで一五二四年に必ずしも大洪水が起きるとは限らないという反論がおきると、それを機会にヨーロッパ中で一五二四年の合について議論が沸騰した。一九一四年にG・ヘルマンはこの惑星群の合現象をめぐって一五一七―二四年のあいだにヨーロッパ全体

で多数刊行された著作（パンフレット）のリストを作成した。その研究によれば、五六人が一三三版（翻刻版を含め）の著作を刊行したという。⁽⁵⁾その後日・タルケンベルガーはこの数字を訂正し、五九人の著作家が六九の著作（パンフレット）を書き、少なくとも一五〇以上の版が出まわったとしている。その内四割にあたる二七人の手になる六〇版はドイツ語の著作だとしている。⁽⁶⁾この多量な著作の出版は、一五二四年の惑星群の合現象が地上に大変革あるいは大災害がおきるという心理状況を生み、また、そのように煽られていたと見ることができる。

アルブレヒト・デューラーが一五二五年に「幻影」という水彩画を描いている「図1参照」が、当時の真理状況が反映されていると見られている。彼はその水彩画の下に自分の見た幻影を解説した文を次のように書いている。⁽⁷⁾

一五二五年の聖霊降臨節後の水曜日と木曜日にまたがる【六月七日―八日】夜の睡眠中に、私は幻影を見た。空からいくつもの巨大な水の塊が落ちてきて、最初の塊は身の毛のよだつような恐ろしさで、大音響をたて拡散しながら、私から四マイル離れた地上に落ち、地上のすべてを飲み込んだ。そのような状況にすっかり恐ろしくなつて、次の水が落ちてくる前に目が覚めた。…朝に起き上がったときに、何が起きたかを上に描いたのである。

デューラーは豪雨による洪水の夢にうなされたが、これは彼がマラリア病にかかっていたことのしるしと言われるが、多くの占星術師が一五二四年に大洪水が起きることを預言していたことへの恐怖心があつたらであらう。

一五二四年の大会合に関わる預言は当時一大センセーションを巻き起こしたことは明らかだが、それ以前にも大小の会合はしばしば起きてい

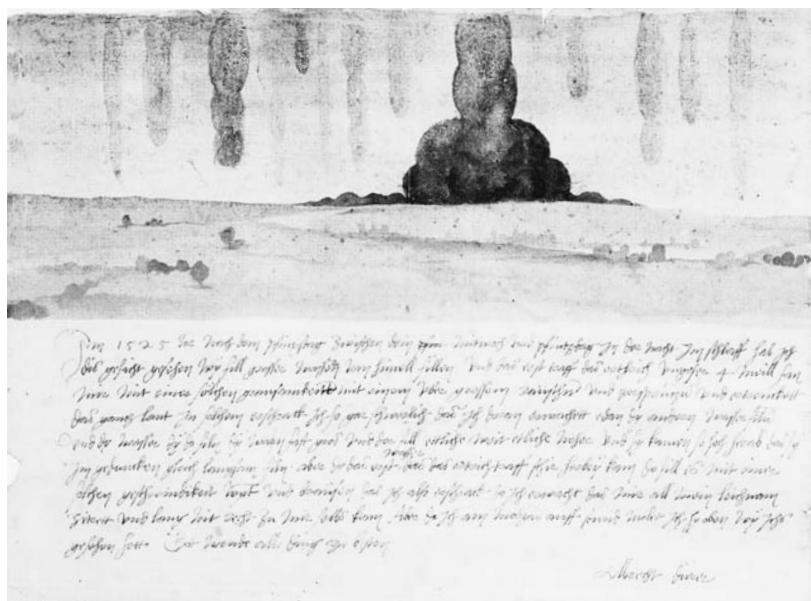


図1 アルブレヒト・デューラー『幻影』(1525年)

る。そこで、一五二四年の大会合を理解するためにも、ゼバステイアン・ブラント(一四五七―一五二一)と占星術の関係をまず考察して、当時の占星術の概略を見て、その後に一五二四年の大会合の預言に関わる代表的なパンフレットを考察してみたい。

II

一五二四年の諸惑星の大会合以前にも惑星の合、つまり天変が少なからずあり、一五〇四年の合についてゼバステイアン・ブラントのきわめて興味深い一枚刷りの木版画ビラがある〔図2参照〕。

ブラントは活版印刷術と木版画を駆使した初期人文主義者の一人であった。彼は一四九四年にバーゼルで刊行したベストセラー・風刺詩『阿呆船』によって日本においても良く知られている。『阿呆船』は初期新高ドイツ語による最高峰の文学作品として評価されているが、それだけではなく、一五世紀末のドイツ政治の惨状、カトリック教会の腐敗・墮落を厳しく批判しており、第一級の歴史史料でもある。

彼は単なる文学者ではなく、ルネサンス時代に典型的なミニ万能人であった。一四七五年に創立もないバーゼル大学(一四六〇年創立)に入学し、一四八九年に法学博士の学位を取得するとともに、バーゼル大学教授となり、一四九二年には法学部長にもなっている。一四九九年のシュヴァーベン戦争に勝利したスイス盟約者団にバーゼルが加盟すると、それを嫌ってブラントは故郷シュトラースブルクに戻り、都市書記となつて政治に関与し、法律顧問となり、外交官としても活躍した。⁸⁾

こうした経歴を持ったブラントではあるが、一四八〇年から死の直前の一五二二年五月まで政治的プロパガンダを目的とする多数の木版画ビラを制作した。⁹⁾ここに掲げた木版画ビラはその一つといえるが、「天空における不可思議な会合について」と題され、惑星の合が描かれ、占星術にかかわるビラであることがわかる。ビラの大きさはおよそA三版で、上部に木版画があり、下部に三列の韻文が書かれ、三列目の最後に

ブラントの名前と制作年が記され、一五〇四年一月に作成されたことがわかる。惑星が擬人化され、合に関係ない惑星である金星と水星はここでは占星術のシンボルマークで書かれている。木版画の図柄を解釈することはきわめて困難である。ブラントの他のピラとは異なって、本格的にこれを扱った研究はコジェカのものしかない¹⁰⁾。しかも彼の研究は他のピラとの関連や歴史的考察に不十分な点が見られるので、ここで詳細な分析を試みたい。

木版画中央に目をやると、大地に大きなエビが描かれている。ただし、このエビはヨーロッパ文化圏ではカニであって、天空の蟹座を意味している。カニの背中の上側には木星と土星のサインが記され、背中の下側には一五〇四年六月一九日と書かれている。つまり、この日に蟹座において木星と土星の合が起きることを示している。ブラントはこの合をどのように解釈しているのだろうか。まず、彼の占星術に対する姿勢はどのようなものであったのだろうか。

ブラント自身は『阿呆船』の第六五編「星占い」において、「やたらに迷信つくりだし、星で未来を占って、阿呆がそれを信じる」と総括した上で次のように占星術を揶揄している。¹¹⁾

夜空の星座や惑星の

動きは何を知らせるか、

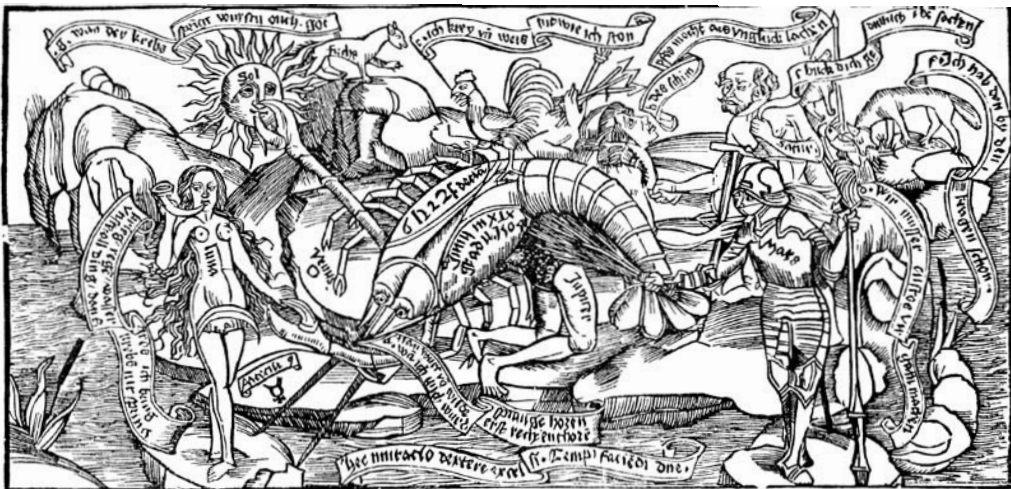
神が何をもうろむか、

さきの世ばかり気にかける。

神がなさろうとすることを

知らねばならぬと思ってる。

しかし、ブラントはこの文の後で次のようにも言っている。



Der dyse Practick wol verston
Der merck dyß groß Coniunction
Da garmach all Planeten Keyten
Werden den Krebs in kurzen zeitten
Auch herrschend der Mon im seym hant
Was ader endlich werd dar auß
Das stell ich hin zu Gott dem herren
Der will all ding zum besten keren
Vnd vnns schützen vor den streichen
Vnd der Planeten trölich zeichen
Vor falschem Lügen des so vil
Wurt vnd ich sorg bald zu her yl
Es wirdt ein falsch geichlecht auff stam
Vnd ein newen Propheten han
Der wirdt ein Lerer vnd ein Merer
Vil üßels vnd ein welt verkerer
Vnd doch in frummen schein sich saygen
Dyß er sein falscheyt rechte thut aygen

Der Krebs wirdt etlich bald abschutten
Die lang zeit haßent fast getritzen
Vil vnser wesen wir er machen
Groß vngesall in freysen sachen
In landen die ich nit will nennen
In kurzer zeit wirdt man sie kenten
Dern einfluß der Krebs vnd der Mon
Mit Irer macht handt vnderthon
Die werden leyden groß vnseid
Dewar Got was da wechse Im seld
Das dem nit Reg noch wassers flut
Ding er was das da nit sey gut
Vom andern ways ich nit sechren
Was die Planeten möchten treiben
Wo Got in nit Ir wöckung nem
Vnd mit sein gnaden das fureten
Got wende des gestirne trafft zu seiten
Aber nach gemeinen lauffß bedekten

So wirdt Juppiter zu schul gefurt
Der von im selbs her flubirt
Wann er nit wer vnpent so gar
Des leyd er was im widerfar
Saturnus wer hat die erlawet
O Mars wie bist so gar ertawet
Das is auff heßen streiflich bend
Ir wollen eynd zu dem end
Dar zu hilffst auch der vnser Mon
Dann naher Krebs das schiff wil gan
Wann man spücht wer het das gemein
Lacht mancher gleich als ob er weyndt
Wer vil hat der wirdt sich klaggen
Wer nit hat der wirdt bei sack heym tragen
Got geß vnns frid in vnnsen tagen

Anno. MCCCC. vnd viere.
Quarto Kalendas Januarij.

S. Brant.

図2 ブラント「天空における不可思議な会合について」(1504年)



図3 プラントの占星術のチャート

そういう予言や占いも、
モーセとダニエルがしたように
悪いほうに向けないで、
魂に害がないならば、
悪い術とはいえないし
人のためにもなることだ。

プラントは占星術を揶揄しながらも、その効用を否定していない。実際に『阿呆船』の一四九八年のラテン語訳第二版に新たに付け加えられた長編詩『腐敗した秩序によって生きるべきものが減んでいることについて』において占星術のチャートが描かれた木版画が掲載されている〔図3参照〕¹²⁾。そこには阿呆「船」の代わりに阿呆「荷車」が描かれているが、何とも奇妙な絵柄である。荷車を引く馬は荷車の後ろにおり、一

人の阿呆が馬に鞭をあてているが、鞭は逆さまに握られている。また、阿呆が履いている乗馬靴の拍車は靴先についており、これも逆さまである。さらに荷車に乗る阿呆も逆立ちをし、まさに「逆さまの世界」が描かれている。さらに荷車の下に四大帝国（アッシリア、ペルシア、アレクサンドリア、ローマ）の空想上の紋章が敷かれ、これらの世界秩序を蟹の紋章で示される阿呆が支配していることをなぞらえている。占星術のチャートには一五〇三年一〇月二日に蟹座で土星・木星・火星の合があることを示している。この年にドイツ（神聖ローマ帝国）の支配権が失われる危険があるが、帝国の構成員が皇帝のもとに結束すれば、危機が逃れられることをプラントは忠告している。¹³⁾ プラントの占星術に対する態度は明らかである。

III

一五〇四年の木版画ビラの作成意図は何であろうか。木版画の絵柄を見ていこう。

蟹は魚、蠍とともに冷血動物として水の象徴体系に入れられ、占星術では蟹座は水と関係づけられる。当時太陽と月は惑星と考えられ、月がこの星座を支配した。それは蟹の左手にあたるハサミが前に伸び、ヌードの女性の左手と握手していることであらわされている。女性の腰の部分には三日月が描かれているだけではなく、胸にはつきりとラテン語で Luna（月）と書かれている。蟹の右のハサミは上方の伸び、人間の顔に描かれている太陽の鼻をつまんでいる。このユーモア溢れる描写は六月に蟹座が太陽とともに空に昇る関係を示すものと思われる。

月は水に関する惑星と見なされていたので、この木版画では大洋に浮

かぶ島の上に立っている。月はホルンを吹きながら、脅迫めいた言葉を述べる。月の脇にある文字の帯には次のように書かれている。「戦争、雨、洪水を私はもたらす。すべてのことは不安定となるが、それでも蟹は跳ねない。」一方、蟹は「荒々しく跳ねる音が聞かれるでしょう。もし私の言うことがまったく聞かれなければ」と書かれている。この木版画は月に支配される蟹座で惑星群の合が起き、洪水・戦乱などの天変地異が起きることを予測している。

ところで、木版画の右半分に見られる三人の人物像は何を意味しているのだろうか。蟹の下敷きになった人物は半ズボンをはき、右太股に Junier (木星) と書かれている。若者の姿に描かれた木星は左手に三本の矢と一本の笏をもち、右手で防御するようなジェスチャーをしている。その木星に対して、二人の人物が攻撃を加えている。髭を生やした年寄りも右手に鎌をもって攻撃しているが、左腕に Saturn と書かれ、しかも右脇下の松葉杖でもわかるように土星である。甲冑を付けた人物の胸には Mars とあり、火星であることがわかる。彼は左手に槍をもち、右手の鞭で木星の尻をたたいている。

それぞれの帯の言葉には次のように書かれている。

木星「恥知らずが不幸を笑うことができる」

土星「忍耐強く、静かに身を屈めておれ」

火星「われわれは不承不承攻撃しなければならぬ」

なぜ木星が火星と土星から攻撃を受け、苦しめられている姿をとっているのだろうか。

これらの惑星が占星術でどのような意味を持ち、図像化されるとき一般にどのような姿を取るのか見てみよう。

一五〇〇年に出版された匿名の小冊子『ベストに関する小論』に掲載

された木版画には、火星と木星の合が取りあげられている〔図4参照〕¹⁴⁾。図の左側は火星で、ローマ神話の軍神マルス (Mars) に基づき、軍旗と刀をもっている。その足下の左右に火星が支配する星座、蠍座と牡羊座も描かれている。図の右側には、右手に矢を、左手に笏をもった擬人として木星は描かれている。その足下には、木星の支配する星座である魚座と射手座が配置されている。ローマ神話のユピテル (Jupiter) は神々の王として天空の支配者に位置づけられる。ここでは一見しては支配者の姿には見えない。

木版画の上の文字は、「われわれ両者が同じ宮に来ると、賢者も愚者も



図4 匿名『ベストに関する小論』



図5 リヒテンベルガー『予言』（ラテン語版、1490年）

死ぬことになろう」と書かれ、火星と木星の合が大量死を予兆させることを示している。

一方、木星と土星の合については、リヒテンベルガーの『予言』に触れられている。一四九〇年にマインツで刊行されたラテン語版の挿絵を見てみよう〔図5参照〕¹⁵。二人の人物が厳しくにらみ合っている姿が見えるが、一四八四年の土星と木星の合を描いていると言われる。右側に松葉杖をつき、左足には棒義足をつけ、左手で鎌を構えている。帽子を被り、胸をはだけたダブリットを着て、典型的な老人姿の土星人物像である。左側の人物は木星をあらわしていることは明らかであるが、その



Als ist eine namhafte Constellation fast wol zu merken und zu betrachten der schwerwichtigen grossen Planeten des Saturni und Jupiters welcher Coniunction und zusamen lauffung: erschrecklich ding direct und verkündiget uns viel zukunfftigs engliche. Und ist vollkommen gewesen nach Christi gepurt im iare 1527. lxxvij. am sunff und zwenzigsten tage Novembris des Manmondes umb die sechste stunde vier Minuten nach mittage wie wol der Krebs eins grades hoch auffstiege über den Horizontem.

Der selbigen zweyen planeten Coniunction und zusamen lauffung geschichte seer selten: und nicht ehe. denn nach der lauffung einer künigen zeit: und weem viel gefarn herum kommen sind: und derhalben bringet sie auch einen stercken einfluss.

図6 リヒテンベルガー『予言』（ドイツ語版、1527年）

シンボルはここには見られない。彼がなぜ牛の角を握り、牛を押さえ込もうとしている仕草をしているのか定かではない。しかし、両者のあいだに蠍を描き、蠍座における合であることははっきりしている。

この図は、一五二七年のリヒテンベルガー『予言』のドイツ語版挿絵でもっとも明確になる〔図6参照〕¹⁶。木版画の上にははっきりと Jupiter および Saturnus と読める。ここでは単なるにらみ合いではなく、土星は鎌を木星に対して振りかざそうとしている。木版画の下の子キストには次のように書かれている。「ここにきわめて重要な大惑星の土星と木星の有名な合が観察されるであろう。この会合は今にも恐ろしいこと生じると脅かし、われわれに将来数多くの不幸が来ることを告げているのである。」

一五〇四年のプラントの作品に示される木星・土星の合が単に抽象的な不幸が訪れることを予言するのであろうか。なぜ木星が攻撃を受け、

苦しめられている姿をとっているのであろうか。これらの惑星によって影響を受ける身分については、ゲオルク・ペントの作品『惑星とその子供たち』で明確に読みとれる。^①このペントの作品には下敷きがある。それは一四六〇年にフィレンツェで制作された匿名の銅版画『惑星とその子供たち』である。両者の比較はここでする必要はなく、ルネサンス時代にヨーロッパである程度広範にこのテーマが知られていたことを確認できるだけで十分である。まず「土星とその子供たち」の図柄〔図7参照〕を見てみよう。

木版画の上部、天空に髭をたくわえた老人が車に座っている。彼は長いマントを羽織り、子供を飲み込んでいる。土星はローマ神話のサトゥルヌス（英語ではサターン Saturn）と同一視され、図像化されるときに神話の内容が利用される。彼が老人に描かれる理由は、一つには神話における最長老の位置にることによると考えられる。またサトゥルヌスはギリシア神話のクロノスと同一視され、さらにギリシア語の「時」を



図7 ゲオルク・ペント
「土星とその子供たち」

表すクロノスから連想して、老年、時、さらには死と結びつけられることになった。

また、図のサトゥルヌス（土星）は子供を飲み込んでいる恐ろしい場面が描かれている。ギリシア神話のクロノスは生まれた子に自分の王位を奪われることを恐れて、子供を次々に飲み込んだ。このことからしばしば土星は子供食いの姿で描かれた。図中で彼の前にいて、球に座って両手を頭に乘せた子供も、次の飲み込まれる運命にあることを示している。

一方、ローマ神話ではサトゥルヌスは農業における豊穡を司る神で、収穫のための鎌をシンボルとしている。このことから土星の象徴として常に鎌が描かれる。ただし、これには異説がある。クロノスはウラノスとガイアの子であるが、ウラノスは生まれた子をすべて冥府に閉じ込めたため、ガイアは怒り、末っ子のクロノスをそのかしてウラノスの男根を大鎌で切り取らせ、その覇権を篡奪させた。そのために鎌を担ぐ姿で描かれるという。

土星の乗っている車の両輪には、土星の支配する二つの星座、水瓶座と山羊座が描かれている。車を引く動物は土星の好みの動物とされるドラゴンである。農業神であるサトゥルヌスは土にかかわることから、土を掘り返す豚と、土中に住むというドラゴンが土星の動物として描かれる。豚の飼育と屠殺の場面が画面の左前面に大きく描かれた理由がここにあるのである。

他方、画面の右前面に描かれているのは施しの場面である。托鉢修道士が婦人と子供にスープを施し、修道女が籠から子供にパンを手渡している。婦人の背後には松葉杖をついた老人が立っている。施しはサトゥルヌスの妻のオプスの仕事であったことからこうした施しの場面が描か



図8 ゲオルク・ペンツ
「木星とその子供たち」

れるらしい。貧者、障害者、罪人なども木星の子供とみなされ、木星がしばしば松葉杖をついたり、棒義足をつけたりする理由がうなずける。

しかし、木星の子供の中心は農耕を中心とする生産者にある。ペンツの図にはさまざまな土と水にかかわる職業が描かれている。畑を耕す人、水を汲む人、伐採・製材する人、皮鞣しをする人、籠を作る人などがある。さらには、手枷・足枷の刑罰を受ける人、死刑を執行されている人がおり、全体的に抑圧されている者、貧しい者のイメージがあろう。

一方、ペンツの「木星とその子供たち」はどのように描かれているだろうか〔図8参照〕。天空を走る車の車輪には木星の支配する魚座と射手座が描かれ、シンボルマークとともに車に乗る人物が木星（ジュピター）であることを示している。ジュピターは本来神々の最高位にある支配者であるが、ここでは当時の領邦君主の姿をとっている。ただし、ジュピターのシンボルである王冠、矢、王笏（あるいは）王杖、鷹のうちわずかに大きな矢が描かれているだけである。フィレンツェの銅版画

では、車を引く動物はジュピターの聖鳥である二羽の鷲であるが、ここでは二羽の孔雀になっている。孔雀は高慢を示す鳥で、ペンツの意図は明らかに当時の支配者のあり方を批判することであることが見えてくる。ジュピターの前で跪いている青年はトロヤの美少年ガニメデスである。ギリシア神話によれば、ゼウスはこの非常な美少年を鷲を使って天上に拉致して、神々の宴席にはべる酌取りにしたという。少年が器に入れてもっているものは、ギリシア神話に出てくる神々の食べ物、アンブロシアと見られる。アンブロシアはきわめて香りよく、蜜（みつ）よりも甘く、これを食すれば不老長寿を約束された。味わい絶妙といわれる蜜の酒と言われるネクタルと混同されたりするが、神々の食事であった。

地上に目を移すと、画面中央の明るい部分に狩猟の風景が描かれている。狩猟は領主の最高の楽しみであり、重要な特権でもあった。狩猟犬ははつきり見えるが、騎乗の領主たちの姿は森と重なって見えにくい。空高く舞い上がっている鳥は鷹に違いなく、鷹狩りも行われている。こうした領主による狩猟特権は、ドイツ農民戦争の時に与えられた農民苦情書のなかで、農民の生活を脅かすものとして改善を求められている。

画面中央左には、ルネサンス様式の建物があり、屋上にはトーチから炎が燃え上がっている。二本の柱に挟まれ、貝殻装飾をもったニッチ（壁龕）の前で裁判が行われている。木星の占星術上におけるもう一つの重要なシンボルは正義の神であるが、ここでの裁きは何を裁いているかは定かではないが、上述の狩猟特権などに見られる領主の横暴が訴えられているのかも知れない。裁判官の前に跪いている人物が農民のように見える。

他方、画面の前面に大きく描かれている場面は、明らかにローマ教皇

による皇帝への戴冠である。教皇はシンボルである三重冠を被り、枢機卿や司教に取り囲まれている。教皇の足に接吻をしようとしている人物は明らかにカール五世と考えられる。フランスとの戦いの勝利したカールは、一五三〇年にボローニャにおいてクレメンス七世から帝冠を戴いた。教皇から帝冠を戴いた最後の神聖ローマ帝国となった。一五三一年にこの木版画を制作したペンツは、ルター派の立場からこの事実を否定的に描いたことは十分領ける。

以上のようにペンツの作品には当時の歴史的事件を濃厚に反映しているが、木星の支配にある身分をはっきり示している。政治的・宗教的支配者や裁判官である。

次に「火星と子供たち」はどのように描かれているだろうか[図9参照]。天空を行く車には抜刀を肩にした騎士がのり、車輪には火星が支配する星座、牡羊座と蠍座が描かれている。ここで注目すべき点は車を引く動物が馬ではなく、血に飢えた狼であることである。このこと



図9 ゲオルク・ペンツ
「火星と子供たち」

が地上におけるシーンを明らかにする。騎士・傭兵による村の襲撃・略奪・暴行・放火シーンである。抵抗する農民の姿が大きく描かれているが、農民は火星の子ではない。火星の子として描かれているのは騎士とそれに従う傭兵である。

ペンツの『惑星と子供たち』の一連の作品には、一五三一年という時代状況と彼の宗教的立場が当然映し出されているが、それぞれの惑星によってどの社会階層を取りあげているかは明瞭である。それは彼独自の見方ではなく、ギリシア神話とローマ神話に淵源をもち当時の人々には作品の意図は明瞭に読みとれたものである。

簡単にまとめると、占星術では木星に支配を受ける階層は支配階級、領主、国王などである。ローマ神話によればジュピターは神々の最高神である。そのために木星は笏をもち、裁きのシンボルである矢をもっている。一方、土星が支配する階層は、鎌で表現されるように農民であり、松葉杖で表現されるように貧しいものたちである。土星が老人に描かれる理由は、神話における最長老の位置にることによると指摘したが、もう一つの理由として土星は公転周期が惑星の中で一番長いという点も加味されている。火星に支配される階層は騎士や傭兵であり、ここでも完全武装した騎士に描かれている。

IV

一五〇四年のブラントの木版画ビラにおいて擬人化された木星・土星・火星による図柄は、ブラントがこの木版画ビラを制作したときのドイツの政治状況を表しているように解釈できる。鎌をもった土星が木星に攻撃をかけるような場面をどのように解釈できるだろうか。

ブラントの活躍した地域、エルザスでは一四九三年にシュレットシュタットを中心にブントシュュー運動という農民蜂起があった。この運動は簡単に潰されたが、九年後の一五〇二年にエルザスより少しライン川を下ったシュパイアー司教区内で新ブントシュュー運動が展開している。さらに一五一三年にはさらに大規模なブントシュュー運動が西南ドイツに展開を見る。¹⁸ブラントの晩年の作品といわれる『自由の銘板』の第四六番に次のような警句が見られる。¹⁹

自由について語られるが、

こんにち多くはそれを心にとどめない。

ドイツは絶えず、ますます

古き自由と慣習から引き離され、

フランス風に陥っている。

それが間違いなくブントシュューにつながっている。

彼らがまもなく戸口にやってくるのを私は恐れる。

ブラントがフランスに敵意をもち、農民蜂起が自分の住む町シュトラースブルク近くに押し寄せてくることに危機感を抱いていたことは明確である。この文が晩年のものであつて、一五〇二年のブントシュューのことか一五一三年のことか正確にはわからない。しかし、一五〇二年にブラントがブントシュューを問題にしていたことは別の木版画から明らかになる。それは一五〇二年にシュトラースブルクのグリュニンガー印刷工房から刊行されたウエルギリウス著作集の挿絵の下絵をブラントが考案していることである。その際に、ブラントは『アエネーイス』や『ゲオルギカ（農耕歌）』の挿絵に彼の時代の風俗・習慣を描かせている。²⁰図10は『アエネーイス』第九巻一一二五行の挿絵で、アエネーアースの留守中にトロイア軍の陣営がトゥルヌスによって襲われた場面である。²¹

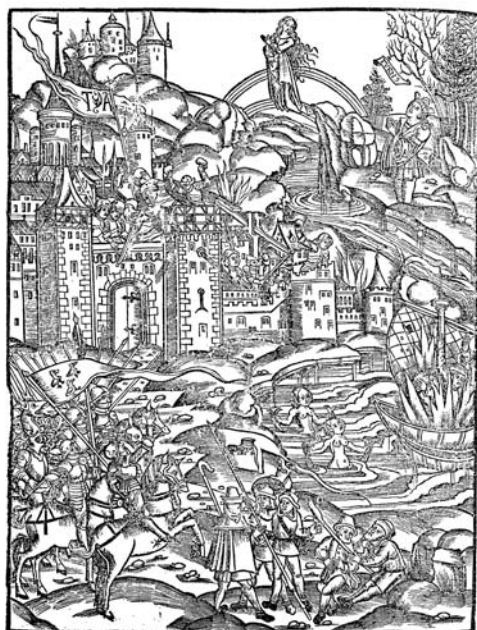


図10 『アエネーイス』第9巻1-25行の挿絵

中央前面で背中を向けているアエネーアースが農民軍と交渉をしているが、そこにブントシュューの旗が描かれている。これはブントシュューの脅威のなかで意識的に描かせたもので、最古のブントシュューの絵と推測されている。²²この点から判断して、「会合」のピラを作成した時点で、ブラントはブントシュュー運動を強く意識していた。したがって、「会合」の土星に農民蜂起を読みとることに無理はないであろう。その後農民戦争まで農民蜂起は各地で勃発していくことになる。

では、「会合」の火星は何を意味していると考えられるだろうか。ブラントの作品が作られた頃、国内政治ではバイエルン継承戦争が勃発していた。²³バイエルンのヴィテルスバハ家はミュンヘン系とランツフート系に分かれていたが、一五〇三年二月ランツフート系のゲオルク侯が男系相続者なしに亡くなり、継承争いが起きあがっていた。ゲオルクは遺書をしたため、女婿のファルツ宮中伯の息子ルプレヒトを相続人に定め

ていた。しかし、それを帝国法違反としてミュンヘン系のアルプレヒトは国王マクシミリアンに訴えた。マクシミリアンは義弟であるアルプレヒトに有利な調停をしたが、ルプレヒトは従わず、都市ランツフートを襲撃し、市民に臣従の誓いを強要した。ブラントの作品が描かれる少し前のことであった。この王への反乱がジュピターの尻をたたく火星の姿に投影されていると考えられないだろうか。

惑星の擬人化とそれぞれのジュエスチャーは、「会合」ビラが作成されたときのドイツの国内政治を描き、それに対するブラントの批判が読みとれる。

V

ブラントの「会合」には、さらに狐と鶏がかかわる動物シーンが二箇所見られる。まず画面上方で、岩の上に立つ狐と蟹の上に立つ鶏が対話をしている。鶏は「私は鳴いているが、私がどうなるのかはわからない」と言っているのに対して、狐は「蟹が跳ねるとき、お前も動くことになる」と答えている。ところが、左の方の画面では、狐が鶏の首に噛みついて、「私はすでに首を捕まえた」と勝ち誇っている。この二場面は何を意味しているのだろうか。シュミートはこの場面をもっぱら政治的に解釈する。ブラントは蟹のような歩みしか取れない（前進できない）ドイツを蟹にたとえて、身動きができないドイツはフランスに対する戦争でしか前進の道はない、という。蟹の甲羅の上で安穩としている鶏はフランスを示し、狐はマクシミリアンで、ブラントはマクシミリアンに狐のもつ策略を手本とするように説いていると、シュミートは解釈している。⁽²⁴⁾

韻文の二列目で、ブラントは次のように書いている。

蟹はまもなく振るい落とすだろう

長いあいだ穏やかに乗っかってきたものを。

多くの無秩序な状態を蟹はおこす

戦争状態のなかで大きな不幸を

あえて名をあげない国において

いずれその名を知ることになるうが。

ここでブラントは蟹がドイツで示していることを暗示しており、シュミートの解釈にそれほど無理がないように思える。

この解釈に対して、シュルツは一六世紀初頭のドイツにおけるペストの流行や飢饉による危機状況に基づいてこの悲観的な占星術木版画は制作されたとしている。⁽²⁵⁾一方、コジェカはイソップ物語の「狐と鶏」に注目している。⁽²⁶⁾確かにブラントはイソップ物語に強い興味を抱いていた。

ブラントは『イソップ寓話集』の集大成を一五〇一年に自ら行っている。このブラント本『イソップ寓話集』は一四八〇年頃刊行されたシュタインハーヴェル本、いわゆるウルム版『イソップ寓話集』を基礎にラテン語韻文を付け加えた第一部と、当時の多数の逸話、笑劇、道徳的金言、奇怪なニュースなどを収集した第二部からなり、木版画入りの大部な版である。⁽²⁷⁾それだけではなく、一四九七年には「狐を使った狐狩り」と題される政治的木版画ビラを「狐と豹」や「狐と猫」などのイソップ物語を下敷きに制作している。⁽²⁸⁾

ここで使われている「狐と鶏」の話の筋は次のようである。⁽²⁹⁾ある狐が村へやってきて、そこにいた鶏へ向かって、「お前の父親の泣き声は素晴らしいが、お前と父親とどちらの鳴き声が良いか判断してあげよう」と語りかける。鶏は得意になって、目をつむって鳴き出すと、狐は

鶏に飛びかかり、森へ連れ去っていった。無思慮に危険を過小評価してはならないと言う教訓を語っていると同時に、人間の運命もいつどうなるかわからないことを教えている。

コジェカは、ブランドが人の運命の不確かさをここで示していると解釈している。しかし、ブランドがこのピラ以前に制作した複数のピラ「エンジスハイムの雷鳴石」、「ヴォルムスの双生児」、「狐を使った狐狩り」の政治的意図から判断して、単純な道徳訓が語られているとは考えられない。これらのピラはすべて愛国心の発露が見られ、マクシミリアンに対し好機を捕らえてフランスとの戦争の必要性を説いている。「会合」以前のピラとの連続で考えるとき、シュミートの見解に従うことが正しいであろう。

VI

ゼバステイアン・ブランドは、木版画ピラ「会合」を作成した直後、一五〇四年七月にアウクスブルクの人文主義者コンラート・ポイティンガーに宛てて次のような手紙を書き送っている。³⁰⁾

この問題（ドイツの衰退）に関する私の見解をあなたに知られないようにすることは不可能です。一〇年前に『阿呆船』で一般的な言葉遣いであからさまに、人間のかかわる事柄には志操堅固なことなどあり得ないことを伝えませんでしたでしょうか。また、蟹座における土星、火星、木星の恐ろしい会合を予言しました。そのとき私が述べたことがまもなく真実になりました。多くの権威者たちが主張するように、星々が実際日常の出来事を決定するかどうか、あるいはピコ・デラ・ミランドラが強調するよう

に、星々は私たちにまったく影響を与えないかどうか、どちらにせよ私の予言は残念ながら正しかった。私は次のように書き続けてきました。³¹⁾

私たちの国には、統一も、平和も、法律も、友情も存在しない。私たちはライオンのように餌を求めて互いに徘徊し、狼のように略奪・強奪する。国内の激しい争いは恐怖と羞恥心で私を満たす。このような無秩序と対抗心のなかで王国と帝国は権力の掌握を失い、支配権は他国へ移ってしまう。こうして私たちは帝権を失ってしまうだろう。分裂した王国は滅亡せざるを得ない。外国の敵に身を曝し、頸木をかけられようとしているのである。それが私たちの運命であることを星々と天の定めが示している。しかし、破滅のときが差し迫っていることを誰も信じていない。ドイツよ、嘆き悲しめ。そのときは近い。帝権は私たちから奪われようとしている。

ここにも愛国的人文主義者の典型的姿勢が読みとれる。したがって、「会合」の木版画ピラもこうした背景のもとに解釈する必要がある。さらに、ブランドは、亡くなる前年の一五二〇年に次のような詩を書き残している。³²⁾ この時期にはルターによる宗教改革はすでに各地に広がり、ルターは一五二〇年六月に「破門威嚇勅書」をローマ教皇庁から突きつけられ、ローマとの対決を鮮明にしている。

世の人々よ、賢明に備えをしなさい
一五〇〇年を数えてのち、
二四年という年に
大混乱がいたるところに生じ、

恐ろしき崩壊が生じるであろう、
あたかも全世界が没落するがごとくに。

神よ、聖なるキリスト教界をお救いください！

聖職者よ、礼節をわきまえ、

根絶やしにされ、喧嘩別れをしないように。

神は望まれている、

洪水が襲い、全地がくまなく水没しないことを。

あるいは、異教徒の軍団が全キリスト教界に侵入し、

さまざまな腐敗をもたらさないことを。

この詩のなかで、ブラントは一五二四年に大混乱が起きることを予言しているが、それはルターによる宗教改革、大洪水、トルコ人の侵入を指している。ブラントはすでに『阿呆船』において聖職者の腐敗を批判し、木版画ビラ「ランツァーの豚」においてトルコ人への十字軍を唱えていたが、死の直前までドイツの行く末を心配していたのである。彼にここでも典型的な愛国主義的文人主義者の姿を見ることができ。

VII

ブラントも触れている一五二四年の惑星群の合に基づく予言については、すでに触れたように非常に多くのパンフレットが刊行されている。

その精緻な研究は今後の課題として、もつとも有名なパンフレットのタイトル・ページの木版画三点だけをここに紹介しておきたい。

最初に取り上げるのは、ブランデンブルク選帝侯の宮廷占星術師ヨハネス・カーリオン（一四九九—一五三七／三八）の作品『大洪水の預言と解釈』である。カーリオンはテュービンゲン大学でヨハネス・シュ

テフラーに学び、フィリップ・メランヒトンとも親しい関係を保っている。

図11はカーリオンの著作『大洪水の預言と解釈』のタイトル・ページである。場面を三分割しているが、左上の図は雨・霰が都市に降り注ぎ、大洪水によって建物が倒れ、都市が沈没・破壊された様子が描かれている。ボートで洪水から逃れる姿、すでに溺れて手だけが水面に出ている人の姿も描かれている。右上は一五二一という数字が見られるように、一五二一年に現れた彗星を描いている。興味深いのは下段の図で、五人の人物が見られる。右端の甲冑を着た騎士の背中部分には火星のサインがあるが、彼は膝を屈している人物の首を刎ねようとしている。膝を屈している人物の肩の部分に木星のサインらしきものが見られる。しかし、三重冠を被っているのが、この人物は間違いなく教皇である。教



図11 カーリオン『大洪水の預言と解釈』（1521年）のタイトル・ページ

皇の背後には刀をもつ人物がいるが、農民、あるいは農民出身のランツクネヒト（傭兵）であろう。彼も教皇に襲いかかろうとしている。その左隣には両手を挙げ、驚愕している枢機卿がいる。左端には冠を被り、右手に錫を持った人物には太陽のサインが示されているが、明らかに皇帝である。皇帝は左手で顔を隠し、目の前の出来事を慨嘆しているように見える。しかし、指のあいだからこっそり見ている感じで、むしろ目の前の出来事を見て見ぬふりをしているように思われる。

カーリオンのこの作品はルターを帝国追放刑に処したヴォルムス帝国議会が開催された一五二一年に出版されており、その当時の政治情勢を映し出している。皇帝カール五世は皇帝の選出以来皇帝とはしつくりいつていなかったし、帝国騎士ウルリヒ・フッテンはローマ教皇を批判し、一五二〇年には『ヴァディスキス、あるいは三題詩』を書き、カトリック教会と単に厳しく対立しただけではなく、一五二二年には騎士戦争を起こし、聖界諸侯を武力攻撃している。下段の図はこの時期の政治情勢を反映していると見て間違いないであろう。

本文テキストで注目すべきことは農民戦争を預言する内容が見られることである。⁽³⁵⁾

上に示したように聖職者と俗人のあいだに分裂と不一致が、加えてキリスト教会の全体的変革と改革が生じるであろう。翌年【一五二五年】にはキリスト教徒の民衆の大流血と有力首長たちの意気消沈が起こるであろう。……同じ年の革命では太陽は土星に好意を寄せる。

一五二二年ライプツィヒで出版された『大洪水の預言と解釈』の別版のタイトル・ページには、さらに興味深い木版画が見られる。しかし、この木版画は一五〇八年に出版されたヨーゼフ・グリユンベックの『自

然の天体像と預言像の鏡』に載せられている多くの木版画の一枚が再利用されている【図12参照】⁽³⁶⁾。画面左上には空から石と火が教会の上に降り注いでいる。教会は崩れかかり、火を噴いている。前面の中央では、刀を振りかざした俗人と短剣を構えた聖職者が戦っている。その左では子ども連れの女性をランツクネヒトが剣で脅している。右下角では跪いている司教をランツクネヒトがまさに短刀で突き刺そうとしている。その後ろには子どもを抱いた女性と手を合わせた男性がいるが、やはりランツクネヒトが刀を振りかざしている。

一〇数年前に使用された木版画をタイトル・ページに再利用しているので、もはや占星術とは関係ない図柄となっているが、この木版画がおそらく人気があったためと考えられる。しかし、カトリック教会と聖職者に対する攻撃場面は共通しており、宗教改革に与する姿勢は明確である。

さらにヨハネス・コップのパンプレットは明確にルター派的立場に立っている。彼はヨーロッパ各地の都市・宮廷で医師として働いて、一

Prognosticatio und Erklärung der großen Weisung: Auch anderer
erhöchlichen vordrungen/ so sich begeben nach Christi
unsern lieben herren geburt/ fünffschenhundert vñ. xxiij. iar
Durch mich Magistru Johannen Caron vñ Dietrich Kayn
Churfürstlicher gnaden zu Brandenburg Astronomi/ mit
fleißiger arbeit zusamen gebracht/ Ganz ettermlich zu lesen
In nutz vñ warnung aller Christgläubigen menschen.



① Gemacht zu Leipzig durch Wolfgang Stöckel. 1522.

図12 カーリオン『大洪水の預言と解釈』（別版、1522年）のタイトル・ページ

五五八年にフィンランドで死去している。ウィーン大学で著名な占星術師であるゲオルク・タンシュテッターの講義に列し、『二三年と部分的に二四年における天体の運行が将来何を証明するか。ヨハネス・コップ博士の判断』というパンフレットをおそらく一五二二年に出版したらしい。ヘルマンによれば四種類の版があるが、一五二三年のアウクスブルク版で本文テキストを覗いてみよう。カトリック修道士に改宗を呼びかけたり、領主には神の言葉を抑圧しないように訴えたりしているが、一五二一四年の月食と合に関連づけて次のように述べる。

大戦争、大流血、火災、平民【ゲマイネマン】と聖職者といいたの不一致と騒乱が起きる。さらに、平民の支配層に対する、つまり司教や聖職者に対するブントシユウが懸念される。貢租義務を負った農民が貢租を払わず、支配層に取り立ての釈明を求めることになるう。

.....

同様に、合は支配層に戦争ゆえに不幸に満ちた年を示すだけではなく、支配層は臣下たちの病気の流行や困窮に脅かされる。臣下たちはともに誓約を結び、一人の主君ではなく、ほとんどの主君にブントシユウを起こす。

しかし、コップは農民たちに自重した行動を促している。

タイトル・ページの木版画は大洪水の様子を描いている〔図13参照〕。前面では教会も家屋も水没し、水面に頭だけ出している三人の男女、水没してわずかに手だけ見える人物を含め、六人が溺れている。背景は大雨の様子を示し、典型的な大洪水の描写である。

ところが、このコップの『判断』の別版タイトル・ページはまったく異なる木版画が利用されており、宗教改革の理念を含むものになってい

る〔図14参照〕。木版画の左側には大砲三門を並べ、背後には槍や刀を抱えた軍団がいる。そこには「勝利の旗」を掲げるキリストの他に明ら

was auff diß drey und zwaynzigst und
zum teyl vier und zwaynzigst iar des
hymels lauff künfftig seyn außweyß. Doctois
Joannis Copp vtrayt.



図14 コップの『判断』の別版タイトル・ページ

Was auff diß
Drey und zwaynzigst und zum teyl vier
und zwaynzigst iar. Des hímels lauff künfftig seyn.
Außweyß Doctois Joannis Copp vtrayt.



図13 『23年と部分的に24年における天体の運行が将来何を証明するか。ヨハネス・コップ博士の判断』(1523年)

かに四人の福音者の著者がいる。彼らは四つの天的生き物になぞられ、マタイは人（人のような顔をした生き物）、マルコはライオン、ルカは雄牛、ヨハネは鷲で表されている。先頭に立ち刀を抱える人物はパウロである。新約聖書をシンボル化し、パウロを強調している点からルターの教えを暗示していることは明らかである。³⁸⁾

大砲の手前に火薬樽があるが、そこにはドイツ語で聖書と書かれている。実際に大砲から撃ち出された弾は書籍で、聖書を示している。聖書を持って攻撃することは、まさに宗教改革の理念である「聖書主義」を示している。攻撃されている側は堅固な城「都市？」で、そこから手を挙げて降参した修道士が出てきている。空からは激しい降雨があり、左上に雲間からは神が城へ向かって火矢を放とうとしている。

コップの『判断』は明確にルター派の立場を取っているが、ドイツ農民戦争を予知し、それを支持していると思われる木版画を最後に見てみよう。それは一五二三年にニュルンベルクで出版されたレオンハルト・ラインマンの『一五二四年に現れる諸惑星の壮大な合に関する予言』のタイトル・ページである「図15参照」。³⁹⁾ 木版画の制作者はエアハルト・シェーン（一四九一—一五四二）と言われている。彼は宗教改革を支持する多数の木版画を描いている。

天空には巨大な魚が描かれ、魚座であることを示している。魚のなかには太陽と月、それに五つの惑星（水星・金星・火星・木星・土星）のサインが描かれ、魚座において稀に見る「大」会合が起きることを示している。特に、木星と土星は惑星軌道の外側をめぐるもので、これらを含めた惑星群の合は滅多に起きず、九六〇年毎だという。それが一五二四年二月に起きて、大洪水・大暴動を起こすことをこの木版画は描いている。

魚の腹から地上に大水が落ち、村に大洪水が起きることが描かれている。教会と二件の家の他に、水におぼれる二人の村人が見える。その洪水の結果多数の病人や死者が生じることを魚の中の骸骨が示すものと考えられる。一方、左右に多数の人々が描かれている。右側の先頭には、王冠を被り、笏を右手にもった皇帝がいる。その背後には驚愕の顔つきをした高級聖職者たちが立っている。三重冠を被り、両手で驚きの表現を示している教皇、つば広帽の枢機卿、三角帽の司教たちである。左側の先頭には、鎌と旗を両手にもった老人がいる。棒義足をつけており、明らかに土星の擬人化である。その背後にはさまざまな農具で武装した農民の一人がっている。農民の蜂起を描いていることは丘の上にドラムを叩き、笛を吹いて戦いへと鼓舞する人物から明瞭である。農民戦争勃発の予兆を示している。

農民戦争の代表的研究者フランツは、木版画の効用について次のよう



図15 レオンハルト・ラインマンの『1524年に現れる諸惑星の壮大な合に関する予言』（1523年）のタイトル・ページ

に述べている。「具象的な木版画は、予言の内容を読み書きできない人にも明示した。そこには大洪水のみならず、将来の現世の変化もまた、印象深く画かれている」と。その例としてラインマンのこの木版画をあげている。⁽¹⁰⁾しかし、この木版画が農民を鼓舞する作品とは一概に言えない。そもそもラインマンのこのパンフレットは、帝国統治院の許可を得て出版されているものである。占星術師は基本的に宮廷に近いところにおり、社会変革の到来を預言しても、多くの場合はそれを防ぐように支配者に要請する側面があるのである。

このほか多数出版された占星術にかかわる木版画とともに今後精緻な研究が求められる。本研究はそのための第一歩である。

【註】

- (1) これらの観点については、森田安一『ルターの首引き猫 木版画で読む宗教改革』山川出版社、一九九三年を参照。
- (2) 中山茂『占星術 その科学史上の位置』紀伊國屋書店、二〇〇五年（初版一九六四年）。
- (3) Farner, Oskar (Hg.), *Zwingli Hauptschriften*. Bd.2. Zurich 1941. S.211f.
- (4) Fricke-Hilgers, Almut, “---das der historiographus auch sei ein erfarnier der geschicht des himels.” Die Sinfthuprognose des Johannes Carion für 1524 mit einer Vorhersage für das 1789, in: *Astronomie und Astrologie in der Frühen Neuzeit (Pircherheimer Jahrbuch*, Bd.5. 1989/90) S.42 のトナメ文より引用。
- (5) Hellmann, Gustav, Aus der Blütezeit der Astronomie, J. Stöflers Prognose für das Jahr 1524, in: *Beiträge zur Geschichte der Meteorologie*. Bd.1. Berlin 1914. S.3-102.
- (9) Talkenberger, Heike, *Sinfthut. Prophetie und Zeitgeschehen in Texten und Holzschnitten astrologischer Flugschriften 1488-1528*. Tübingen 1990. S.155.

- (7) Ruprich, Hans (Hg.), *Durer, Schriftlicher Nachlass*, Bd.1, Berlin 1956, S.214f.
- (8) トラントの生涯について Knappe, Joachim, *Dichter, Recht und Freiheit. Studien zu Leben und Werk Sebastian Brants 1457-1521*. Baden-Baden 1992 を必見。古典的研究として Charles Schmitt, *Histoire Littéraire de l'Alsace. A la fin du XVe et au commencement du XVIe siècle*. 1966 Hildesheim (Nachdruck der Ausgabe. Paris 1979). tome 1. pp.189-333. 簡単には Knappe, Joachim, Sebastian Brant, in: Stephan Füssel (Hg.), *Deutsche Dichter der frühen Neuzeit 1450-1600*. Berlin 1993. S.156-172 を参照。トラント研究に必携の文献目録として Knappe, Joachim und Dieter Wutke (Hg.), *Sebastian-Brant-Bibliographie. Forschungsliteratur von 1800-1985*. Tübingen 1990 を必見。参照してください。
- (9) Hentz, Paul (Hg.), *Flugblätter des Sebastian Brant*, Strassburg 1915 中の復刻版である。この中の中の解説について森田安一「狐を使った狐狩りーゼバスティアン・トラントの政治的木版画」『史料』第四一号、二〇〇〇年、三三―五七頁を参照。
- (10) Chojeka, Ewa, Ein Unbekannter mit dem Namen Sebastian Brant verbundener astrologischer Holzschrift, in: Chojeka, Ewa, *Astronomische und astrologische Darstellungen und Deutungen bei kunsthistorischen Betrachtungen alter wissenschaftlicher Illustrationen des 15-18. Jahrhunderts*. Berlin 1967. S.56-70.
- (11) Sebastian Brant, *Narrenschiff*, hrsg. von Friedrich Zarncke. Leipzig 1854 (Unveränderter reprografischer Nachdruck. Darmstadt 1973) S.64f. [現代ドイツ語訳 Brant, Sebastian, *Das Narrenschiff*, übertragen von H.A. Jungmans, Stuttgart 1964. S.232f. の下には尾崎盛景訳『愚舟船』(上) 現代思潮社 一九八四年、二五頁以下を利用。]
- (12) 『愚舟船』トナメ語第一版について Zarncke, Brant, S.121ff. を参照。木版画について Sébastien Brant, 500e anniversaire de la Nef des Fols 1494-1994 -Das Narren Schyff. Zum 500jährigen Jubiläum des Buches von Sebastian Brant. Basel 1994. S.197 を参照。
- (13) Vgl. Gilbert, William, Sebastian Brant: Conservative Humanist, in: *Archiv für Reformationsgeschichte*, Bd.46 (1955), p.156.

- (14) Chojeka, Ein Unbekannter. S.56 u.68.
- (15) Lichtenberger, Prognostificatio. Mainz 1492, in: *Der Bilderschmuck der Früdruce*, von Albert Schramm, Bd.XV, Die Drucker in Mainz, Leipzig 1932, Nr.1101.
- (16) Die weisungunge Johannis Lichtenbergers deutsch. Wittenberg 1527, in: HansJoachim Köhler, Hildegard Hebenstreit-Wilfert, Christoph Weismann (Hg.), *Flugschriften des frühen 16. Jahrhunderts*, Mikroforme-Sammlung, Zug 1978-1987, Nr.2309, Dig.
- (17) Zschelletschky Herbert, Die "drei gottlosen Mäler" von Nürnberg, *Sebold Beham, Barthel Beham und Georg Pencz. Historische Grundlagen und ikonologische Probleme ihrer raphik zu Reformations- und Bauernkriegszeit*, Leipzig 1975, S.134ff.
- (18) Franz, Günther, *Der deutsche Bauernkrieg*, 8 Aufl. Darmstadt 1969, S.53ff. (幸尾・中村・前田・田中共訳『メーレン農民戦争』未来社、一九八九年、九五頁以下。簡単じぢ Benzing, Manfred, und Siegfried Hoyer, *Der deutsche Bauernkrieg 1524-1526*, Leipzig of (1965), S.11f. (瀬原義生訳『メーレン農民戦争 一五二四〜一五二六年』未来社、一九八九年、一六頁参照。)
- (19) Zarncke, Brant, S.161; Knappe, *Dichtung*, S.499.
- (20) トビヘン・ジ・マ・ネ『メーレン農民戦争』の挿絵ぢ、Vergil, *Aeneis*, Übersetzt von Johannes Götte. Mit 136 Holzschnitten der 1502 in Straßburg (bei Grüninger) erschienenen Ausgabe. Herausgegeben und kommentiert von Manfred Lemmer. München 1979 2刷、ふねね。Vgl. Schneider, Bernd, "Virgilius pictus" Sebastian Brants illustrierte Vergilausgabe von 1502 und ihre Nachwirkung. Ein Beitrag zur Vergleichsreception im deutschen Humanismus. In: *Wolfenbüttel Beiträge : aus den Schätzen der Herzog August Bibliothek*, Bd.6, 1983, S.202-262.
- (21) Vergil, *Aeneis*, S.235; Sack, Vera, *Sebastian Brant als politischer Publizist. Zwei Flugblatt-Satiren aus den Folgejahren des sogenannten Reformreichstags von 1495*, Freiburg im Breisgau 1997, S.34; *Sébastien Brant, 500e anniversaire de la Nef des Fols 1494/1994*, S.106; 部分図を Knappe, *Dichter*, S.241f. 242f.を。
- (22) Vgl. Sack, *Sebastian Brant als politischer Publizist*, S.34.
- (23) 江村洋「中世最後の騎士 皇帝マキシミリアン一世伝」中央公論社、一九八七年、二七四頁以下。
- (24) Schmidt, Karl, Einige deutsche Gedichte von Sebastian Brant, in: *Alsatia. Neue Beiträge zur elssässischen Landes-, Rechts- und Sittengeschichte, Sage, Sprache und Literatur*, 1873-1874, hrsg. von Augst Stöber, Colmar 1875, S.66.
- (25) Hentz, Paul (Hg.), *Flugblätter des Sebastian Brant*, Strassburg 1915, S. X 24f. Schultz の解説。
- (26) Chojeka, Ein Unbekannter, S.58.
- (27) Brant, *Sebastian, Esopi apologi sive mythologi: cum quibusdam carminum et fabularum additionibus Sebastiani Brant*, Basel 1501, 1) の版本は現在 CD 版で読める、462f. (1998 Cuperfection-Agentur für neue Medien GmbH, Ludwigshafen)。
- (28) 森田安一「狐狩り」参照。
- (29) Brant, *Esopi* [CD-Ausgabe], S.144, ロバート・ヘンリクス、鍋島能正訳『メーレン寓話集』弓書房、一九八六年、五九頁以下に「鶏と狐」の詳細な話は掲載されていない。
- (30) König, Erich (Hg.), *Konrad Peutingers Briefwechsel*, München 1923, S.33f. Cf. *Manifestations of Discontent in Germany on the Eve of the Reformation. A Collection of Documents Selected*, Translated, and Introduced by Gerald Strauss, Bloomington/London 1971, pp.224-5.
- (31) 次の引用文は「阿呆船」の一四九七年のラテン語訳第二版にある長編詩「腐敗した秩序にめづる生か死か」の滅びゆくメーレンのラテン語訳に飛ぶ飛ぶの引用である。
- (32) Strobel, Adam Walther, *Das Narrenschiff von Dr. Sebastian Brant, nebst dessen Freireichstafel*, Leipzig 1839, S.34.
- (33) 森田「狐狩り」三九頁参照。
- (34) 森田「索引」猫 一一〇頁。
- (35) Carion, Prognosticatio vnd erklerung der gorssen wesserung/ Auch anderer erschrockenlichem weuckungen. So sich begeben nach Christivnsers lieben hern geburt/ funffzehnen hundred und xxiiij. Jar. in:Hans-

- Joachim Köhler, Hildegard Hebenstreit-Wilfert, Christoph Weismann (Hg.), *Flugschriften des frühen 16. Jahrhunderts*. Mikrofilm-Sammlung. Zug 1978-1987, Nr.2170, Bii.
- (36) Joseph Grünpeck, Spiegel der natürlichen himmlischen vnd prophetischen Sehungen, in: *Flugschriften des frühen 16. Jahrhunderts*. Mikrofilm-Sammlung. Nr. 2024.
- (37) Was auff disz Dreyundzwantzigest vnd zum teil vyerundzwantzigest iar. Des himels lauff kuennfftig sein. Ausz weylß Doctoris Johannis Copp vrtztl. in: *Flugschriften des frühen 16. Jahrhunderts*. Mikrofilm-Sammlung, Nr.3155, B-Bii
- (38) 森田『首引き猫』第二章「神の水車」を参照。
- (39) Reyman, Practica, Nürnberg 1523, in: *Ohn' Ablaß von Rom kann man wohl selig werden. Streitschriften und Flugblätter der frühen Reformationszeit*. Hg. v. Germanischen Nationalmuseum Nürnberg. Nördlingen 1983 にフタムヘンペリ版あり。
- (40) Franz, *Bauernkrieg*, S.91 (寺尾他訳『農民戦争』一五〇頁。翻訳書のカヴァーにこの木版画が使われている。
- (41) Friedrich, Johann, *Astrologie und Reformation. Oder Die Astrologen als Prediger der Reformation und Urheber des Bauernkrieges. Ein Beitrag zur Reformationsgeschichte*. München 1864, S.157.